影なる王女

第九章

「みごとに咲き誇った」

風に舞い散る桃の花吹雪の中、息長皇母は、傍らの八須女に言った。稚建皇子が大王の位に即き、春日郎女が皇后と称せられてより、彼女もまた皇后から皇母と号せられた。

「心地は如何？」

八須女は、久々に化粧して外に出た皇母の貌を覗き込み、微笑んだ。

「もう、悪阻は過ぎたようだ」

皇母は、そっと腹部を撫でた。

懐妊が明らかになって一月が過ぎた。稚建大王と春日皇后が難波の王宮に遷って後、住吉にある大伴の邸内に建てられたわびしい苫屋に起居していた皇后は、祝いに訪れた金村にまず命じた。仮の宮を造れ、と。

「吾は、日継ぎの皇子を孕んだ身」

同じ時期に、稚建の胤を得た春日皇后には、懐妊の兆しはなかった。

内乱で多くの蓄えを費やした金村は、またも多くの財を傾けることになった。河内の地にあった先の大王の別宮が修復され、庭には池や築山、桃園が造られた。

「そう言えば……」

広い桃園のなかに設えられた亭に腰を降ろした皇后に、八須女は声を潜めた。
「新たに、五十の兵が東に向かったとか」
「いずくの豪族の兵か？」
「大伴から二十、物部から十、あとは、佐伯、三輪、羽田、久米などより二、三ずつ」
「その知らせは、誰より」
「物部八束より」
皇母は微笑んだ。
物部は、平群や葛城が滅んで後は、大伴に継ぐ豪族に成り上がった。一族を束ねる物部荒鹿比は、剛毅な武人として知られ、人望も篤い。
八束は、荒鹿比の甥にあたる。二十歳になるこの若者と、初めてまぐわったのは二年前。以後、月に一度は王宮の寝屋に忍んで来ていた。今も、大伴の兵に周りを囲まれ、外に出ることも許されぬ皇母のために、さまざまなことを報せてくれる。
「八束は、如何であった？」
皇母の問いに、八須女は「常と変わりなく」とやや眼を逸らして応えた。
「隠さずともよい」
皇母は八須女の肩を叩いた。
「次に来たらば、八束にこう言え。悪阻も過ぎた故、吾が寝屋に来よ、と。八須女も伴に参れ。三人で快を尽くそうぞ」

「八束が言うには」
八須女は、覆い被せるように言った。
「物部の一族のうち、皇母に味方する者三人、当主・荒鹿比の許しなしに動かせる兵は五十。他、毛野、許勢なども、皇母に心を寄せつつあり、と」
寄せつつあり……か。皇母は微笑んだ。毛野ならば男君、許勢ならば茅楯であろう。いずれも、皇后であったころ、寝屋を伴にした若者たち。まだ稚ない八束は、自ら集めた同志と誇りたいのであろうが……。
皇母は、不器用に彼女を抱く初々しい八束の貌や、白く柔らかな陽物を口に含んだ感触を思い起こした。
「荒鹿比が動かねば、吾が策は成り立たぬ」
冷ややかな口調で、皇母は言った。
「そう八束に伝えよ……ただし、焦って、すべてを無にするな、と」
宮の外を、慌ただしく早馬が駈けすぎ、馬蹄の響きが近づいて、やがて遠くに消えた。
「何の早馬であろう……」
皇后は、苦渋を噛みしめる大伴金村の貌を思い浮かべ、薄く笑んで呟いた。
「東からの凶報であれば、よいのだが」
「兄よ、やはり東からの報せであった」

荒々しく足音を立てて入ってきた大伴羽生を、金村は眉間に皺をつくって見上げた。
「五十の兵を東に遣わしたばかりというに、濃の国の河を渡っていた吾が兵五十、大水で流されたという」
床を響かせて坐した羽生は、広げた竹簡から眼を離さぬままの兄・金村に苛立たしげな眼差しを送った。
「新たに兵を送るか、さもなくばヤマトに帰るか、命を待つ、とのことだ」
「兵を新たにか……」
「五十や百ではない。東の二十国は今やことごとく背いた。三百でも足りぬ、とのことだ」
「三百……」
金村は、竹簡を膝に置き、天を仰いで嘆息した。
「いまのヤマトに、さような余力はない」
「しかし……」
羽生は、拳を固めて床を叩いた。
「いま、東より兵を退かせれば、大王家の御稜威は……」
そんなものは、もとよりない……。金村は心の裡で呟いた。御稜威など失われた……あの夜、息長皇后が稚建皇子のふぐり玉を潰した時から……あるいは、息長皇母の懐妊が明らかになった時から……。
何も応じない兄が、羽生には歯痒かった。かつては、こうではなかった。変事が起こり、

羽生がわめけば、すぐさま金村は策を口にした。その策が外れたことはなかった。だが今の兄は、惚けたように、天井を見上げるのみ……。
「いずれにせよ」
金村は、重そうに腰を浮かし、立ち上がった。
「吾が意のみで兵を動かすことはできぬ」
「いずくへ行く」
背を向けて歩き出した金村に、羽生は問うた。
「難波に行く」
金村は足を止めて、呟くように言った。
「大王に奏上する」

何時の間に、これほどの桃の木が……。
王宮の門をくぐった金村は、咲き誇る桃花に眼を奪われた。
わけは分かっていた。息長皇母の仮宮の桃園の噂を聞いた春日皇后が、いずくかの山より、桃を移植させたに違いない。
樹下で笑いさざめいていた宮女たちが、金村の姿を認めると、いっせいに拝跪した。華やかに着飾った宮女の輪の中に、春日皇后と影皇女がすらりと立っていた。
金村は膝を突き、春日皇后は軽く頷く。

貌をあげ、口を開こうとして、言葉が喉に詰まった。
着飾った孔雀(くじゃく)……。
金村は、そういう名の鳥を、海の彼方より伝わった絵でしか知らない。だが、濃く化粧し、金色の装飾品で総身を覆い、白絹の衣に鮮やかな紫の裳(ショール)を巻き、顎をあげて父親を見下ろしている皇后の美しくも驕慢な姿は、極楽鳥とも呼ばれる異国の鳥を思わせた。
その隣に立つ影皇女もまた、縮れた髪をまとめて鼈甲(べっこう)の櫛(くし)をさし、薄桃色の絹衣に深紅の裳。かつての荒々しげな風情は消え、濃く描いた眉、白い頬や唇に紅をさし、己が美しさに気づき、化粧によって誇張する喜びを覚えたかのようだった。
「大王に拝謁したい」
金村は、極彩色に飾り立てた二人の女が醸(かも)し出す妖(あや)しさに気圧(けお)されつつ、口を開いた。
「大王は、心地悪(ここちあ)しく、臥せっている」
春日皇后が、金村を見おろしつつ言った。影皇女がふと手を延ばした。指の先に、蝶が舞っていた。皇女は、水色の紋様で飾られた黒い蝶に見入り、春日皇后に笑顔を向けた。
まことに大王が臥せっているならば、かつての影皇女なら、片時も側を離れず付き添っていたはず……。
金村は、宙に舞う蝶の姿に見入り、笑いさざめいて言葉を交わす春日皇后と影皇女に、互いを見交わす眼差しに、数日前に聞いた噂を思い出した。
このごろ、春日皇后は、影皇女の寝屋で夜を過ごしているらしい……。

女同士のまぐわいは、禁忌とされている。金村は、噂の広まりを怖れ、それ以上に、かつては手の内にあり、彼の策に沿って動いた二人が、手綱を振り切った奔馬のごとく、彼の意の外で駆け回っていることに、何もできずにいる己の無力さが苛立たしかった。
「吾が代わりに聞いて、大王に伝えよう」
そういう皇后に、金村は、東の蝦夷の叛乱が容易ならざる事態を迎えていること、その事態にどう処するか、朝議を開いて決したいことを告げた。
「東の蝦夷……」
皇后は、蝶の行方を追って裳裾をなびかせて歩き回る影皇女を、にこやかに見つめながら言った。
「兵を送って鎮めればすむこと。朝議を開いて神意を問わずとも、誰と誰に兵を出させるか案にまとめ、大王の裁可を得ればよい」
「三十や五十の兵ではすまぬ故に……」
「ではいかほど」
「まず三百……かなうことならば五百」
「ならば……」
皇后はしばし宙を見つめて思案し、おもむろに口を開いた。
「物部が二百、将軍(いくさのきみ)は八束。毛野が五十、将軍は男君。許勢は五十、将軍は茅楯……」
金村は、背筋が冷えてゆくのを覚えた。

物部八束、毛野男君、許勢茅楯。皇后が挙げた名は、いずれも息長皇母と通じている若者たちだった。多くの者に探らせて知ったことを、なぜ皇后は知っているのだろう。自らの配下を扶養して手足として使っているのか。あるいは、大伴の身内のなかに、皇后に知らせた者がいるのか……。

皇后は、ただ王宮で遊びほうけ、贅を尽くしているだけではない。

「朝議を開くよう、大王に奏上しよう」

額に汗し、黙したままの父を嘲るように、春日皇后は言った。

神意は、太占と呼ばれる方法で問われる。

まだ日の昇らぬうち、王宮の奥深い室に火が焚かれる。大王がその火に鹿の骨を投じ、その焼け具合を見て、占人が神意を読みとる。

その間、豪族どもは外の広庭で待つ。やがて大王が姿を見せ、神意を告げ、それに従って豪族たちが話し合い、細かな策を詰める。それが朝議であった。

太占の場に侍ることを許されているのは、大王とその近しい親族のみである。大伴金村は、皇后の父として立ち会うことを許される身ではあったが、稚建大王が位に即いてからというもの、一度も呼ばれていない。

そもそも、大王が朝議に出席することすら、このごろでは絶えてない。病がちで人前に姿を見せることもなくなった大王の代わりに、妹の影皇女が火に鹿骨を投じる役を務め、

もの言えぬ彼女に代わって春日皇后が豪族たちに神意を伝えるのである。

すなわち、ヤマトの政事は、金村が容喙する隙もなく、二人の女たちによって動かされていた。

もし、次の朝議に稚建大王が出ねば、春日皇后が大王に代わり、息長皇母に通じる者どもを東に遣わす旨の神意が伝えられよう。確かに、懐妊したことで威勢を取り戻しつつある皇母の手足を削ぐ効果はあるだろう。だが、あからさまに排除された彼等が、東の叛乱を鎮め得るか。むしろ、東の蝦夷と手を結び、叛旗を翻すこともあり得る。皇母ならば、平然とそれをやる。そうなれば、北の旦波や高志がどう動くか。

互いへの憎悪のみを軸に事を運ぶ二人の女によって、国が滅ぶ。それを止める手だてが、金村にはない。あるいは、皇后と二人きりで差し向かい、父として叱り諫めることはできるかもしれない。だが、皇后の側には常に影皇女がいる。否、たとえ二人きりになれたとしても、威をもって皇后を諫められるかどうか……。

金村には負い目があった。

まだ皇后となる前、春日郎女は父の意を体して動いてくれた。父の策に荷担させ、辛い思いを味わわせたことで、聡明で快活な娘を驕慢なばけものにしたのではないか。そう思うとき、金村の胸は痛んだ。

いずれにせよ、新たに征東の軍を興すにせよ、その人選を「神意」に委ねるわけにはゆかない。

「皇后……」
大伴金村は、やっと貌をあげて娘を見た。
「いま名をあげた者たちを遣わすか否かは、吾等豪族が談合して決めたい」
「むろん」
皇后は頷いた。
「いま挙げた名は吾の思いつき。ただし、神意によって彼等の名が出たときは、そのままに伝えねばならない」
挑発するように見おろす眼差しに、金村は、息苦しさを覚えた。息長皇后が執政していた時にも感じなかった重苦しさを。

「父は老いた……」
大伴金村が去った後、春日皇后は呟き、寂しげに微笑み、すぐに笑みをおさめた。
「玉菜」
呼ばれて年かさの宮女が進み出、傍らに膝を突いた。
「住吉から何か報せは？」
住吉は、大伴の本邸。春日皇后もまた、皇母と同じく、かつて肌を合わせた同族の若者たちを、自らの耳目として遣っていた。
「今宵、金村が出かけると」

「いずくへ？
「そこまでは」
「いずれにせよ、父は今宵、住吉の本邸にはいない……」
皇后は唇を引き結んだ。
「玉菜、住吉に使者を。今宵、大王より詔が下される。兵を動かせるよう備えを、ただし……」
その口調にわずかな震えが混じっていた。
「父と……それから叔父の羽生、真噛には気づかれぬように、と」

夜。
生駒の山麓、渋川なる物部氏の本邸にて、大伴金村は、物部一族を束ねる物部荒鹿比と二人、向かい合っていた。
物部荒鹿比は五十歳。筋骨逞しく盛り上がった腕や肩、鼻も眉も太く、それでいて思慮深げな眼差しの持ち主である。
「東のことは、聞いていよう」
静かに切り出した金村に、荒鹿比は注意深く頷いた。
「もはや、新たに征東の軍を興すか、あるいは東から兵を退くか、二つに一つ」
「兵を退くと？」

荒鹿比は訝(いぶか)しげに言った。
「それでは、この三年に及ぶ吾らの難儀は……」
「分かっている。吾が大伴も、東で多くの兵を失った」
いつになく苦渋の面持ちを崩さない金村に、荒鹿比は口を噤(つぐ)んだ。
「もし、新たに征討の軍を興すとなれば、物部は何人兵を出せる」
「十の兵を出したばかり」
荒鹿比は、唇を曲げ、眉根を顰めた。
「大伴も二十の兵を出したばかり。互いに、これ以上の兵を出し、軍の費えを賄(まかな)えまい」
「では、東より兵を退くというのか……」
「他に策はあるか？」
荒鹿比はしばし黙した。金村から口を開いた。
「さきほど、王宮を訪(おとの)うた」
「王宮を？」
「大王に拝謁はかなわなかったが、皇后に朝議を開くよう奏上した」
「皇后は、東の件を知っているのか」
「知っている。それで……」
金村はじっと荒鹿比を見つめた。
「汝が子、八束を大将軍として、物部には二百の兵を出せと」

「二百だと……」
荒鹿比は呻いた。
「それでは、物部の男すべてを吐き出さねばならぬ」
「他に、毛野から五十。許勢から五十」
「その数は、春日皇后が言ったのか……」
荒鹿比の眼に怒りが浮かんだ。
「毛野も許勢も、それだけの兵を出すことはできまい、それに、何故、大王でもない皇后が、それを決める。そもそも汝が娘ではないか」
「然り……」
金村は貌を歪めた。
「しかし、太占によって神意が告げられれば、拒むわけにはゆかぬ。そして太占の席に侍るは、おそらく皇后と影皇女のみ。即ち、春日皇后の意がそのまま髪意となる……」
「大王は？」
「病とて、人にも会わぬ」
荒鹿比は、俯く金村を凝視し、ゆっくりと口を開いた。
「で、汝は吾に如何せよと……？」
「汝の力を借りたい」
「何の力を？」

「朝議のやり方を改める」
「どのように？」
「先の大王が崩御して後、朝議に先だって太占が行われ、しかる後、吾ら豪族が神意に沿って談合した。今後は、まず吾等が談合して後、定まった策が正しいか否かを、太占にて問う。そのような形としたい」
荒鹿比は息を呑んだ。金村の案はすなわち、大王家の権限を大きく削(そ)ぎ、事実上、豪族の合議によって政事を行うに他ならない。
金村は眼を上げ、膝を寄せた。
「大王家とはいえ、吾等豪族の兵や財なくば何の力もない。吾と汝が手を組み、他の豪族どもと語らい、意を同じくして奏上すれば、必ず聞き入れられる。でなければ、無用に兵は失われ、国は荒れ廃(すた)れるのみ」
「待て……」
荒鹿比は両手をあげて制した。
「その前に問いたい。東の乱を、汝ならば如何に鎮める」
「兵は出さず……」
金村は言った。
「東に使者を遣わし、かの国の王(きみ)どもと談合する」
「使者には誰を」

「吾が赴く」
「行って何を説く」
「彼等と、乱を鎮める方策を談合する」
荒鹿比は、口を噤み、しばし腕組みした。
策の多い男だが、謀(はかりごと)を弄しているようにも見えぬ……。
そう思ってみると、金村の頭には白髪が増え、貌の皺はより深く刻まれ、肌の色は生気がない。春日皇后との不和の噂も耳には届いていた。
金村が、真剣にヤマトの行く末を憂えていることは、疑いはない。とはいえ、その策の多い来し方を思えば、うかつに信じてよいものか……。
そのとき、激しく室の扉が叩かれた。
「誰か！」
荒鹿比の問いに、扉の向こうで声がした。
「八束が捕らえられた」
「八束が！　誰に！」
「大王の命を受けた大伴の兵に……」
「大伴の……？」
腰を浮かした荒鹿比は、血走った眼を金村に向けた。

その日の夕刻。
渋川よりやや離れた草原で、三人の若者が鞠を打ち合って興じていた。一人ずつ向かい合い、薄く切った板で鞠を打ち、対する者が打ち返す。もう一人は、すでに汗を拭いながら、酒の椀を口に運んでいた。
「待て、八束……」
飛んできた鞠を打ちそこねた若者が、よろめき転んだ。
「息が切れた……」
「男君はなかなか上達しないな」
物部八束は朗らかに笑い、荒く肩を上下させる毛野男君に歩み寄り、肩を叩いた。
「弓ならば汝にひけはとらぬ」
「負け惜しみはよせ」
坐して酒を飲んでいた許勢茅楯が笑った。
「日が沈まぬうちに、酒にしよう」
いずれも、色白く、髭もまだ薄い若者たちであった。彼等から離れて、下部たちが膝を突いていた。興の用意もある。酔いつぶれても、彼等が運んで邸まで帰ることもできる。
許勢茅楯は、地に据えた大瓶から酒を酌み、二人に椀を渡した。
「ところで……」
一杯目の椀を飲み干し、早くも眼の縁が赤らんだ物部八束は、二人を見回した。

「例の件、吾等、盟を結ぶに異存はないな」
「異存はない……ただ」
毛野男君は口ごもった。
「ただ？」
「汝が叔父、物部荒鹿比は、必ず吾等に味方するのだな」
「必ず味方するはず」
「はず？　まだ同意を得ていないのか？」
眼を剥く許勢茅楯を、八束は手をあげて制した。
「叔父は日頃より、大伴をあしざまに罵り、大王を押し込めて政事を独り掌中にする金村の娘を憎んでいる。吾等が多くの味方を集め、万全の策を練れば、叔父は必ず味方する。まず、味方をより多く集めるのが先」
「しかし……」
男君が口を開いた。
「その前に、大伴に洩れては如何する」
「洩れぬようにすればよい」
八束は声を荒げた。
「吾等には息長皇母がついている。ただ独り、日継の皇子を腹に宿した皇母が」
その腹の子は、吾が胤でもあり得る……。皇母によってまぐわいを覚えた三人の若者は、

同じ言を心の裡で呟き、皇母の滑らかな白い肌、豊かな胸乳、暖かな陰（ほと）、そして快に喘（あえ）ぐ妖艶な貌を思い描いていた。

「皇母の名を出せば、必ず味方は集まる」

強い調子で言い募る八束に、二人は頷き、頷きつつも、貌をあげることができず、地面の草を見つめていた。

「弱気な……」

八束は、木の椀を投げ捨て、下部（しもべ）どもに「帰るぞ」と声をかけた。男君や茅楯が裏切り、八束を密告するのではないかという懸念は、粗暴なこの若者にはない。

だが、下部どもは動かなかった。みなこちらに背を向け、腰を浮かし、一点を見つめていた。

「如何した」

他の二人も気配を察して立ち上がった。

遠くから馬蹄が響いていた。それはやがて大きくなり、草原を踏みつぶして七騎、甲冑に身を固めた兵が姿を現し、下部どもの群に突き進んだ。

たちまち悲鳴があがった。蹄（ひづめ）に頭蓋を砕かれる者、背を踏み折られる者、危うく逃れて草むらに突っ伏す者、下部どもは悉（ことごと）く倒れた。

騎馬隊は素早く円を描いて三人を囲んだ。三人は狼狽え、剣を抜いた。

「吾は物部八束。何者か、何故の狼藉なるか！」

一人の兵が馬より降りた。

見れば、兜（かぶと）は冠らず、縮れた髪を左右に分けて結び、白い脚を剥き出しに、深紅の巾（スカーフ）を美々しく着飾っている。

影皇女……。

三人は息を呑んだ。一人で七十の敵を倒した彼女の姿は、彼等の脳裏に焼き付けられている。

影皇女は、無言で八束に近寄った。恐怖におののき、手にした剣を振り上げることもできず、八束は股間を蹴り上げられ、苦痛の呻（うめ）きを残して地に這った。

毛野男君と許勢茅楯は、おめきを挙げて影皇女に向かって突進した。

真っ先に振り下ろされた男君の剣を身をかわして避け、つんのめった相手の首に肘を打ち込み、同時に相対した茅楯の両手首を掴み、ねじった。苦悶の叫びをあげた茅楯の股間に膝をたたき込み、這いながら逃げようとする男君のふぐり玉を爪先で背後から蹴った。

息をすることもできず股間を両手で押さえて七転八倒する三人を見下ろしつつ、影皇女は馬に跨った。兵どもが馬から降り、三人を後ろ手に縛り上げた。

同じ頃、百の兵に襲われた河内の息長皇母の仮宮は、その周囲を守る兵どもも抗うことなく門を開け、華やかな桃園は蹂躙された。

独り奮戦し十数の兵を倒した宮女の八須女は全身に矢を浴びて倒れ、皇母は捕らえられ、

馬に乗せられて難波へと運ばれた。

「吾は何も知らぬ」

物部の一族に詰め寄られ、金村は必死に弁じた。

「知っていれば、吾独り伴も連れず、この渋川を訪(おとな)うものか」

物部荒鹿比は、傍らの同族を見た。確かに、物部の邸の周囲に、金村の伴らしき者は見あたらない。同族の者たちはいっせいに首を振った。

「では、大王が汝に断ることなく大伴の兵を動かし、吾が甥を連れ去ったと言うか」

疑いの眼差しを消さない荒鹿比に、金村は言った。

「吾は難波へ行く。事の次第を吾が眼で確かめたい。荒鹿比、汝も共に来よ」

「王宮に、殺されに行けと言うのか」

押し黙った金村を、荒鹿比は憐れむように見た。

「汝の言がまことならば、大伴を束ねる金村が、同族にかくも蔑(ないがし)ろにされたということだな」

金村の脚から力が抜け、ゆっくりと床に両膝が落ちた。内心感じていたこと、感じつつも否定してきたこと――すなわち、自らの威が失われたことを他者に口にされ、己を支えつづけてきたものがすべて崩れ去った虚しさを、金村は噛みしめていた。

王宮の奥深く、太占を行う狭い室の梁(はり)に、半裸に剥かれた物部八束、毛野男君、許勢茅楯が、手首を荒縄で結われて吊り下げられていた。

室の中央の竈(かまど)に火が焚(た)かれ、占人が薪をくべている。その傍らに、春日皇后と影皇女が、薄く笑みを浮かべて佇んでいた。

「汝等……」

春日皇后が言った。

「盟を結び、大王を害しようと策をめぐらしたは、まことか？」

貌を強張らせて震える物部八束に歩み寄った皇后は、手を延ばしてふぐり玉を掴んだ。

八束は身を反らせて悲鳴をあげた。

「八束、まず汝が応えよ」

「……否(いな)」

八束は身悶えしつつ、声を絞り出した。皇后が影皇女を見た。皇女は手にした鹿骨を火に投じた。黒い煙が立ち昇り、油のはぜる音とともに獣の匂いが立ちこめた。占人が鉄の箸で骨を拾い上げ、子細に眺めて首を振った。

「神意は、汝が偽りを言ったと、ある」

皇后は、涙を流して首を振る八束を嬉しげに眺め、指に力をこめた。八束は雷に打たれたように痙攣し、やがてがくりと頭(こうべ)を垂れた。

八束の右のふぐり玉は、皇后の掌中で潰れていた。

「次は男君」
ゆっくりと歩み寄る皇后に、毛野男君は「否……否……」と呟きながら嗚咽した。
「確かに……」
金村は床に両手をつき、俯いて呻いた。
「吾は、吾が一族をすら、律していない……。だが、荒鹿比よ」
金村は貌をあげた。
「汝もまた、一族の八束が、息長皇母と通じ、大王と吾が一族を害せんとしたことを、知っていたか」
「何を言う！」
荒鹿比は金村の肩を掴んだ。
「八束は、かつて皇后だった息長の寝屋に忍び、寵愛を受け、今や懐妊した皇母の意に沿って許可勢茅楯た毛野男君と謀（はかりごと）をめぐらしていたことを、汝は知っていたか」
「偽りを言うな！」
「偽りではない！」
金村は、荒鹿比の胸ぐらを掴み、貌を寄せた。
「この十七年、かの皇母の暴政の下、多くの豪族が滅ぶ中、吾等大伴は、王宮に、豪族どもの邸に、諜者を置いて細大漏らさず、各々が動きを掴んでいた。それ故、生き延びた。

荒鹿比、同族を律し得なかったは、汝も、毛野も、許勢も……」
荒鹿比の背後に集った物部の一族は、固唾（かたず）を呑んで金村を見つめた。
「吾と同じ」
「汝は……」
荒鹿比は紅潮した顔を歪めて、静かに言った。
「何を言いたい」
「この十七年」
金村は立ち上がった。
「吾等はヤマトのうちにて相争い、憎みあい、財を傾け、兵を失い、互いに信を置かず、一族の束ねは緩み、外にては乱を招いてきた。このままでは国が滅ぶ」
金村は、荒鹿比の胸ぐらを掴むばかりに訴えた。
「荒鹿比、吾とともに、ヤマトに平らかなる和を……」

ふぐり玉を一つずつ潰され、半死半生で喘ぐ三人の若者に、春日皇后は桶（おけ）の水をふりかけた。若者たちは冷たい水に眼を覚まし、地獄の苦痛が蘇り、うめき声をあげた。
朦朧と青ざめた貌に、うつろな眼で見回していた若者たちは、あっと声をあげた。
室の隅に、息長皇母が、後ろ手に縛られ、布で口を封じられ、坐っていた。その背後に、影皇女が、じっと皇母を見おろして立っている。

皇母は、すべての衣服も装飾品も剥ぎ取られ、全裸だった。懐妊以来、はちきれそうに張った胸乳が重く垂れさがり、腹部の膨らみも目立っている。長い髪はほどかれて貌の半ばを覆い、躯(からだ)のあちこちに殴打されたらしい蚯蚓腫(みみずば)れが刻まれ、それでも眼は憎悪に滾(たぎ)っていた。

「大王を害せんとした悪逆の者どもよ」

春日皇后が、権高な笑みを浮かべて三人を見回した。

「汝等の罪はそれだけではない。皇母の寝屋に忍び、子を孕ませ、日継の皇子と偽り、大王家を乗っ取ろうとした」

三人は恐怖に引きつった貌を、何度も振った。

「覚えがないとは言うべからず。すでに皇母はすべてを告げた」

皇母が激しく身じろぎし、猿ぐつわの下で呻いた。影皇女はその髪を掴み、貌をねじあげた。

「むろん、皇母が孕んだ子が、大王の胤でもあり得る。故にここは神意を問おう。神意を問うた後、腹の子が汝等のうちいずれかの子であれば、孕ませた者と皇母には死を与える」

「如何に……」

物部八束が、唇を震わせながら問うた。

「神意を問う」

「影皇女」

春日皇后は、皇母の髪を掴んだままの皇女を呼んだ。皇女は皇母を突き飛ばし、皇后に歩み寄った。

「これより、皇女が汝等のふぐり玉を蹴る。潰れた者があらば、即ち皇母を孕ませた者」

三人は悲鳴をあげ、口々にわめいた。

「黙れ」

皇后は、八束の股間に膝を打ち込んだ。八束は激しく痙攣した。他の二人も悶え苦しむ八束の姿に口を噤んだ。

「皇女よ」

皇后が眼で合図し、影皇女はまず、許勢茅楯に歩み寄った。蒼白の面もちで歯を食いしばり、総身の筋を強張らせた茅楯に、皇后は嘲るように言った。

「皇女は、一蹴りでふぐり玉を二つ潰したほどの大力ぞ」

茅楯は涙を流し、影皇女を見つめて慈悲を乞うた。皇女は容赦なく、右足を背後に引き、凄まじい力でつま先を股間に叩きつけた。すでに瓜のように膨張していた陰嚢が、大きく揺れた。

茅楯は絶叫し、再び意識を失った。

春日皇后は歩み寄り、陰嚢を掴んでまさぐった。茅楯は眼を覚まさぬまま、かすかに震え、喉の奥を鳴らした。

「潰れていない……」

頬を紅潮させ妖しく微笑んだ皇后は、眼差しを隣に吊された男君に向けた。
「吾ではない……」
男君は叫んだ。
「吾は決して、精は漏らさなかった……常に……口に……」
皇后は身を折って哄笑した。
「あからさまに言うことよ。されど、それがまことか否かは、神意が証すこと」
男君の頬を軽く叩いて身を引いた皇后にかわり、影皇女が男君の前に立った。ゆっくりと歩み寄り、膝で蹴り上げた。男君の身は激しく突き上げられ、つま先が地から離れて宙に浮いた。男君は白眼を剥いて気を失った。その唇から舌がこぼれ出し、涎が垂れた。
「男君でもないか」
彼の陰嚢をまさぐりながら皇后が言い、物部八束に眼を向けた。
「否……否……」
八束は激しく嗚咽し、同じ言を繰り返した。脚を固く閉じ、首をさかんに振っている。
「まことに覚えがないならば、潰れることはない」
皇后は、八束の髪を撫でて整えながら柔らかな口調で言った。
「ふぐり玉は、一つあればまぐわうに足りる」
言いつつ、指を彼の股間にあてがい、残ったふぐり玉を抓り挙げた。八束は身をよじり、それでも脚を開こうとはしなかった。

「さては……皇母を孕ませたは、汝か」
皇后は笑みをおさめ、鋭く八束を見据えた。
「吾ではない……」
「ならば脚を開け！」
今度はきつく、玉が裏返るばかりにひねりあげた。八束は身をのけぞらせ、激しく噎せ、やっと脚を開いた。
影皇女が八束の前に立った。皇后は、意味ありげな目配せを送り、皇女は頷いた。
皇女のつま先が、八束の陰嚢を襲った。一度ではなかった。素早く二度、三度、四度とたてつづけに蹴られた。八束の全身が嵐に吹かれた松の木のように震え、陰嚢が瞬く間に倍の大きさに膨張した。
五度目の蹴りが、八束の股間に炸裂した。陰嚢が破裂し、大量の血が迸(ほとばし)った。
室のなかに絶叫が轟いた。
振り向けば、息長皇母が、うつぶせに伏せ、床に額を打ち付け、慟哭(どうこく)しつつ叫んでいた。
「やはり八束が……」
春日皇后は、だらりと頭を垂れて動かなくなった八束の足下の血溜まりを、つま先で探った。完全に潰れて原型を止めないふぐり玉が二つ、血の海に浸っていた。
「皇女よ」
潤んだ眼で皇后を見つめる影皇女を、春日皇后はそっと抱きしめ、耳元で囁いた。

「皇母の腹に宿っていた子が、大王の胤ではないと分かった上は、汝が積年の恨みを晴らせ。腹の子ごと、皇母の身を引き裂き、骨を砕き、苦しめ抜いて、殺せ」

門前で馬蹄が轟いた。

金村を囲んでいた物部の一族のうち、二人が室の外に出で、やがて戻ってきた。

「難波からの使者が」

「王宮よりか？」

問うた荒鹿比に、その者は応えた。

「然り」

「使者の名は！」

「大伴狭手彦（さてひこ）」

「狭手彦が？」

大伴金村が立ち上がって叫んだ。狭手彦は金村の次男。春日皇后の異母弟である。

「何故に……狭手彦が」

金村は呻き、門に向かって走り出した。荒鹿比らが後を追った。

門の外は、松明（たいまつ）を掲げた数十の騎馬兵で埋め尽くされ、篝火（かがりび）が昼のように周囲を照らし出していた。

「狭手彦！」

門の櫓（やぐら）に登った金村は、騎馬兵の中心にいる己が子に叫んだ。

「何故、吾に断りなく兵を動かした！」

「大王の命が下ったとき、父は本邸にいなかった。故に兄等と談合し、兵を動かした」

「何故、物部八束を捕らえた！」

「毛野男君、許勢茅楯らと謀り、大王を害せんとしたが故に」

「彼等を捕らえたは、大王の命によってか？」

金村と並んで櫓に登った物部荒鹿比が怒鳴った。大伴狭手彦は傲然と叫び返した。

「大王の命である」

「して、三人はいずくに？」

「難波の王宮にて、すべてを告げ、潔く自ら首を縊（くく）った」

「八束が……死んだと……」

荒鹿比は呻き、膝を落とした。門のうちに物部の一族、下部どもが、殺気立ち、武器を手に集まっていた。

狭手彦はさらに叫んだ。

「さらに八束は、息長皇母が孕んだ子は、彼が胤であることも告げた。故に、腹の子は、流させた」

金村は、総身の震えが止まらず、苦しげに肩で息をしていた。

大王の命であろうはずがない……。

命を下し、三人を拷問し、息長皇母に責め苦を与えて流産させたのは、春日皇后。
金村が娘。
「ただし、八束は、この度の謀は、彼が一人のたくらみにして、物部一族には関わりなしと告げた。故に大王は、物部一族を罪には問わない。物部荒鹿比よ、夜明けとともに王宮に来よ。大王の詔である！」

闇のなかで、春日皇后は身を起こした。
寝衣が冷たく濡れ、額の生え際にも、玉の汗が浮かんでいた。
傍らで、安らかな寝息が響いてきた。
影皇女が、大きな躯を童のように丸めて寝入っている。
皇后は褥から出で、室の隅の水瓶から手桶で水を掬って呑んだ。ひと心地がついたが、汗にまみれた褥に戻る気にもならず、冷たい床に腰を下ろし、壁に背をもたせかけた。
物部八束、許勢茅楯、毛野男君の三人を去勢した上で殺した。突き上げる快に身を委ねつつ、彼等がおぞましい苦痛に貌を歪め、身悶えし、懇願し、血反吐をはき、やがて動かなくなる様を楽しんだ。さらに、身重の皇母を影皇女がいたぶり、腕をへし折り、股間や鳩尾を蹴り上げ、眼を抉り、血塗れの肉塊へと変えてゆくのを、酒杯を片手に楽しんだ。
四つの屍の始末を占人に委ね、寝屋に入った皇后と皇女は、褥のなかで睦み合い、快をむさぼった。果てて後、皇女は眠りに落ちたが、皇后は、昂揚が過ぎて後の寂寥のなか

に、恐怖がこみあげてくるのを止められなかった。
何度も眠ろうとして、眠れず、眠りに落ちた瞬間におぞましい夢を見た。
殺した……。
憎い相手だった。大王の胤を受け、子を孕んだ皇母。
己が大王の子を産む手だてを奪った皇母。
恐ろしい苦痛に苛まれながら、哀れみを乞う眼差しで見つめられ、その眼差しを楽しんでいた皇后だったが、快果てて後、その眼差しが脳裏から離れない。
なぜ、悔いる……。
殺して当然の女ではないか……。
腹の底から突き上げる切ない感情にいたたまれず、春日皇后は、室を出た。暗い回廊を足早に進み、王宮のさらに奥へ、大王の寝屋へと急いだ。
稚建大王の寝屋は、至る所うずたかく竹簡が積まれていた。
稗田の蔵から出させた史。
大王は終日、寝屋にこもって酒杯を片手に竹簡を読む。過去の世界に浸り、快を尽くし子をなせなくなった己が身をしばし忘れ、そのまま寝入る。
扉を開けた皇后の鼻を、酒の匂いが突いた。竹簡に埋もれるようにして眠る大王の傍らに、酒が半ば注がれた椀が置いてあった。

大王は、赤い貌で、荒く鼻で息をして眠っている。酒がまだ、躯のうちで発酵しつつあるらしい。
皇后は、室の隅の水瓶に、衣の袖を浸し、大王の傍らに膝を突いて、額を拭いた。
苦しげに歪んだ大王の貌が、次第に穏やかになってゆく。
いとおしい思いがこみ上げ、皇后は大王の額に唇を押し当てた。
「……皇后か」
大王が瞼を開け、かすれた声で呟いた。
皇后は、微笑んで応えた。大王も笑った。その笑みに、皇后は、粟粒がたつようにざらざらしていた胸の裡が、柔らかく満たされるように感じられ、大王の胸に頬を押し当てた。
「如何した」
大王の手が、皇后の頭に伸び、髪を撫でた。
「何やら、騒がしかったが……」
皇后は貌を上げ、しかし応えず、こう言った。
「今日も、史を読んで過ごしたのか」
「然り。史は面白い」
大王は、ほつれた皇后の髪を整えながら言った。
「このヤマトの成り立ち。先の大王たちの事跡。そのいずれがまことで、いずれが偽りなるか、吾には定められぬ。ただ、稗田の史人どもの巧みさよ、うまく辻褄を合わせたもの

と、興が募る」
大王は、掌で皇后の額の汗を拭った。
「汝が、子を欲するならば……誰でもよい、健やかな男と交わり、子をなすがよい。吾はその子を、日継の皇子とする。吾はもはや子をなせぬが、辻褄は、史人どもが繕ってくれよう」
頬を撫でる大王の柔らかな微笑みに、皇后の胸が切なく疼いた。不意に視界がぼやけ、涙が溢れ出た。
大王が、訝しげに皇后を見た。
「今宵……」
しばし逡巡した後、皇后は口を開いた。
「大王を害せんと謀をめぐらした息長皇母、さらに物部八束ら三人、この王宮にて罪を糾した」
「皇母を？」
身を起こしかけたのを、皇后は両手を大王の胸に当て、ゆっくりと押し倒した。
「八束らは、こう告げた。皇后の孕んだ子の胤は、八束のものであると……。その子を日継の皇子として、大王と大伴を滅ぼし、大王家を乗っ取る策をめぐらしていたと」
強張る大王の貌に、皇后は唇を当てた。
「彼等は皆、罪を悔い、自死して果てた……」

皇后は、大王の貌を見た。大王の眼は、動かずに天井を見つめていた。
「すべては大王のため……」
皇后の言を聞いてか、聞かずしてか、大王の眼は動かなかった。
「否……」
皇后の眼から再び涙がこぼれた。
「吾は憎かった……皇母が憎かった……」
大王の眼が動き、春日皇后を見た。
「大王の子を孕んだ皇母が憎かった……」
大王は手を伸ばし、皇后の頬の涙を拭った。
「故に……殺した……」
「大王家の胤は……」
大王は、皇后の肩に手をかけ、引き寄せつつ言った。
「絶えたのだな」
皇后は、大王の胸に貌を埋め、小さく頷いた。
「絶えても、よいのだ……」
大王は、皇后の背を抱いて言った。
「妹皇女に誰か娶(めあわ)せ、子をなすという手だてもある。さきほど言うたように、汝が誰かと交わって子をなすことも……」

「否……」
皇后は首を振った。
「吾は……大王の子より他に、孕みたくはない」
そのとき、扉が開いた。
影皇女が、眼をこすりながら立っていた。
「皇女……」
皇后は立ち上がり、皇女に歩み寄り、その肩を抱いた。皇女は、拗ねた眼差しで、大王と皇后を見つめた。
「今宵は、三人で寝よう」
皇后の言に、皇女は頷いた。

女たちは、頭を大王の両脇に委ねるように背を丸め、童のように眠った。

夜が明けた。
王宮の広庭に、物部荒鹿比が膝を突き、大王の出でますを待っていた。
その背後に、大伴金村が、眦(まなじり)に疲れを色濃く刻んで坐していた。
扉が開き、春日皇后が姿を見せた。
「物部荒鹿比よ。大王の詔である」

荒鹿比は額を地につけた。
「ただちに兵二百を率い、東の蝦夷の乱を鎮めよ」
「諾」
貌を上げた荒鹿比は、躊躇うことなく言った。
だが、その面持ちは、大王の命を忠実に承る武人のそれではなかった。
荒鹿比は、意を決した……。
金村は、そう見て取った。
ヤマトのため、大王家にも抗う意を。
「疾う、兵を整えよ」
皇后の声に、荒鹿比は再び拝礼し、立ち上がり、広庭を去った。
廟堂の階に立つ春日皇后は、広庭の隅に俯いて坐す父をしばし眺め、やがて踵を返して内に入ろうとした。
「皇后」
金村の声に、春日皇后は足を止めた。
「談じたき事あり。王宮の内に入るを許されよ」
「何を談じる」
皇后は、金村に背を向けたまま言った。
「談じることは何もない……」

扉が閉まり、金村は独り、広庭に残された。

生駒の山を越え、葬列が続いていた。
棺の前後を、騎馬の兵が守り、稚建大王と春日皇后が輿に乗って続き、大伴金村以下の主だった豪族が随う。征東の軍を整えるに忙しい物部荒鹿比の姿はなかった。
息長皇母の崩御が公に広められたのは、彼女が難波の王宮で撲殺されてから五日の後であった。皇母の屍は、難波ではなく、生駒の山を越えた飛鳥に近い狭城楯列の地に葬られる。
大王家に連なる者は、生前より大きな塚を築き、そこを墳墓とする。だが、息長皇母は、人の手で築いた塚ではなく、小さな丘に石を積んで形だけ整えた陵に埋められた。
三日に及ぶ葬儀が果てて後、宮処人たちは海柘榴市に到り、宴が催された。その宴の席に、住吉の大伴の邸から使者が駈けてきた。
「旦波が兵を挙げた」
使者は、宴席から離れた物陰で金村に会い、こう告げた。
「高志も旦波とともに軍を興した。千を越える兵が、淡海に迫っている」